

## 令和5年2月11日(土・祝)開催 全体共有した内容(概要)

### (1グループ)

- ・イエナプランはよいと思った。学年を分ける必要がないということも理解できる
- ・フルインクルーシブの捉え方が非常に難しい。人によってどう捉えるのか…。国立市として方向性をみんな考えていく必要がある。
- ・しょうがいのある方が地域の中で暮らせるように、また、学校は共に学ぶ場であり共に育つ場であることを大切にしていきたい。協力できることは何でも協力する。
- ・発達しょうがいがあり通常の学級にいる際に非常に苦しかった経験があることから、多様な学びの場等、教育の在り方を見直す必要がある。
- ・先生が子どもを育てるといよりは、みんなで子どもを育てるという理念が大事だろう。
- ・子ども同士が育つということを考えれば、保護者の役割がまずは大切ではないか。
- ・多くの地域の人が学校に入ることはとてもよいことだと思うが、大人だけではだめだろう。子ども同士がそれをどう理解し、どういうふうに入れて学校生活を送るかということが大切ではないか。  
→これを行うには、担任一人では難しい。体制づくりを考えていく必要があるだろう。
- ・学校が校長がどういう学校にしたいから、地域の人にきていただくか。学校の理念とか願いとかフルインクルーシブ教育についての考えをしっかりと発信した上でなければ、地域・保護者も協力するにもなかなか難しいのではないか
- ・地域・保護者のくくり分けもあるが、まずは保護者だろう。保護者と一緒に学校もどういう学校にしたいか追求していく必要があるのではないか。保護者をどう巻き込んでいくかだろう。

### (2グループ)

- ・汐見先生のお話はそのとおりだと思う。そういうふうにしていきたい。
- ・野畑小学校の取組も、国立市でも取り入れられるところは取り入れていけたらよいと思う。  
→ただ、1度に全部を変えるというものは、子どもにとっては負担になるだろうし、学校も混乱するのではないか。小さな1歩かもしれないが、できることを一つ一つ変えていけたら。そのためには、教育委員会が方向性を明確に示すこと、子どもに関わるすべての人が共有理解のもとで、関わっていく必要があるのではないか。
- ・野畑はぐくみ隊のような取組が広がるとよい。
- ・教員資格だけでなく、介護や育成会など様々な経験のある方が関わることで、しょうがいのあるないにかかわらず、子どもへのかかわりが広がるのではないか。
- ・国の制度が変わっていかねば難しいことだが、1学級の人数を減らすとか、教員数を増やすとか…。
- ・学校外には見えない教員の仕事があり、多忙だろう。教員に限らず、私たちも心に余裕がないと弱いところに強くあたりがちになってしまう。  
→どうしたら、教員の負担軽減ができるのだろうか。
  - ・フルインクルーシブ教育を明確にしていくこと
  - ・学校とサポーターのマッチング(コーディネート)仕組み
  - ・サポーターに何をサポートしてほしいのかを明確にすることで、協力しやすくなるのではないか。

### (3グループ)

- ・野畑小の取組によって、子どもたちの変容を聞きたかった。
- ・今の育ちの環境の中で、インクルーシブを感じる場所がないのではないか。例えば、しょうがいのある方、高齢者の方、外国籍の方、様々な方が周りにいるはずなのに、気付いていないのでは。

- ・マイノリティの方にマイノリティを感じさせてしまう場面が多いのでは。
- ・学校を選んできている。教員もそれをあたりまえに考えている。一方、うまくいかないことがある。様々な子どもがいて、サポートする人もたくさんいる。それをコーディネートすることが難しい。
- ・支援学級内には様々な子どもがおり、どの学級より多様化しているのではないかと。子ども同士で互いの理解がすすみ、受け入れている。
- ・担い手が不足している。
- ・保護者がサポーターの一員にならなければならないと思う。←地域がサポートしていく必要があると思う。

#### (4グループ)

- ・子どもの意見表明権をどうやって実現していくのか。
  - ・不登校の子どもの思いを聞き、学校がしっかり受け止めた。
    - ・運動会の競技種目を子どもたちが決定した
    - ・子どもたち一人一人が自分の考えを伝えられるか。例えば、「じゃがいもは固いです」と伝えられるように、そういうところまでいかなければ、一人一人の意見表明につながってはいかないのではないかと。
- ・しょうがいの自認がない子どもたちにとって、選択することが難しいのではないかと。子どもたちの関係性の話やどこの学校にいかなければならないということが、今いる学校で同じような教育を受けられるのがよいのではないかと。
- ・日頃の授業、教室の中で、同じことができないということから、外れてしまうと異質だと捉えられてしまう。そこを周囲の子どもが受け止められるということがないかぎり、課題が出てくるのではないかと。
- ・当事者ではない子どもや保護者の理解がないと難しい。

#### (5グループ)

- ・学年があがるにつれ、教室に入れなくなり、週に2日のときもあった。オンライン学習や地域の居場所、友達と遊ぶことで、自分と同じ気持ちの人もあるんだなど知ることができた。担任が味方になってくれた。前向きな言葉かけをしてくれ、週5日学校に行けるようになった。
- ・支援学級の子どもが増え続けている。通常の学級を居心地のよい場所にすることが大切である。複数の大人が入ったり、1学級あたりの子どもの数を減らしたり、オンラインを活用したりするなど工夫することで、通常の学級にいられる子どもが増えるのではないかと。
- ・学年の枠をなくして、たてわりで様々なことを共有することが大事。一律にみんながあがっていくことがちがうのではないかと。いろいろな課題を自分で選べるのが大事。勉強も教え合うことも大事だし、一緒にいることで分かることもたくさんある。相手の気持ちを汲み取ることもできるようになる。配慮することできるようになることもある。